

世界への挑戦

山岸倫也

RinYa YaMaGiShi

初の日本代表チーム選出のいきさつ

第4回の全日本大会(常陸太子)で選手権クラス2位となった私は、念願のオーリンゲン大会派遣選手となった。地元みちの会の先輩、安藤尚一がもたらした北欧の衝撃的な情報に触れてから3年目のことである。また、ノルウェーで開催される世界選手権大会の日本代表メンバーも杉山隆司、小山格、高尾昭次、そして山岸の4名に決定した。最年長の杉山が22歳、最年少の私が19歳の若いチームである。当時は国内選考レースもまだ実施されておらず(SQUADによる国内選考会の開催は81年から)、どうやって決めたのか当事者の私もよく覚えていないが、参加の意思がある若者が手をあげ、そのメンバーが自他ともに日本を代表する選手であったということだろう。一般の

オリエンティアは76年当時と同じで、世界選手権大会出場などは、杉山スクール(おそらく一般にはこんなイメージかな)のごく一部の若手選手だけが考えている特殊なこと思っていたはずである。

80日間の欧州遠征計画

大学生であった小山、高尾、山岸の3人は、この機会にオーリンゲン大会(7月第2週開催)から世界選手権大会(9月第3週開催)までの80日間に及ぶ長期遠征を計画した。杉山らを通じてヨーロッパにはオーリンゲンだけでなく、スイス5日間やチェコ5日間など魅力的な競技会がたくさんあることを知った私たちは、この際できる限りの多種多様な競技会に参加しようと考えていた。下記に大まかな日程をまとめておこう。

7月
第2週 オーリンゲン5日間

(スウェーデン)
第3週 ユニバーシアード大会
(フィンランド)
第4週 スイス5日間
(スイス)

8月
第1週 チェコ5日間
(チェコスロバキア)

この間、チェコからノルウェーに移動

9月
第1週 トレーニングキャンプ
(ノルウェー)
第2~3週 世界選手権大会
(ノルウェー)

いま思うと、よくこんな日程をこなせたものだ、その若さと好奇心に感心するばかりだ。特に最初の4週間は28日のうちにレースが17日、トレーニングが5日、移動が6日。休養日なしの強行日程である。しかし、国によって大きく異なるトレインや地図(もちろんIOF基準で統一されているが)、競技コンセプト、気候や食事など、若くて柔軟性のある時期にオリエンテーリング競技の多様性を体験できたことは、その後の競技スタイルに大きな影響をもたらしたと思う。

初めてのオーリンゲン大会

当時のオーリンゲン大会は地図やコースのクオリティもすばらしく、運営もシステムチックで、まさに競技面でも運営面でも「お手本」となる大会であった。広大なキャンプ場に立ち並ぶ無数の

世界への挑戦

キャンピングカー、5レーンからなるゴールレーンとクラブテント、なんとも開放的なトイレとシャワー、会場への選手の大移動による交通渋滞など、名物とっていい風景に次々と出くわした。出場したのはM19-20A相当のクラスで、レースの内容は可もなく不可もなし。フラットな地形に戸惑いはあったものの、技術的に難しいレベルとは感じなかった。しかし、スピードで圧倒されてしまった。私はジュニアのAクラスでも上位で戦うほどのスピードとそれを支える手続きを身につけていなかったのである。1970年代後半のスウェーデンの典型的な地図(資料1)を示すが、こうしたトレインでは高速でのナビゲーションとファインなフェーズへの的確な切替が求められる。私には北欧の森における実戦経験とそこから得られるスキルが圧倒的に不足していた。

大陸での経験

スイス5日間大会はいまや伝説の競技会で、環境問題がシビアさを増すなかで定期的には開催できなくなってしまった。北欧と違い、山岳トレインのプレアルペンや、なだらかな丘をつなぐミッテルランドなどのバリエーションも楽しい。競技中に垣間見るスイスアルプスの雄大は風景も圧倒的である。また地図の美しさ、精密さもスイスならではのものがある(資料2)。スイス5日間が好印象だったのは出場したM19-20A相当クラスが私自身の

競技レベルにちょうどマッチしていたことである。3日目の岩場のトレインで大きなミスを侵し、順位を後退させたものの、最終日には20位争いの集団で走ることができた。少し経験をつめばメダルを争うことも可能だと実感できた。海外での上位を競う体験は出場クラスのランクを落としてでも定期的に体験する価値がある。

一方、チェコでは競技よりも生活面でうちのめされた。食べ物も水も合わないし、毎日暑くて体力を回復させる余裕がない。風呂なんてあるはずもなく、泥池での水浴びがシャワー代わりの毎日だ。こういう生活に順応できない限り、選手として本当に強くはなれないと分かってはいても、強行日程の4週目でもあり、まったく身体がついてこなかった。あんなさけない。トレインは砂岩の尖塔が立ち並ぶイーチンの森。フラットな森は高速サーキットで東欧の馬みたいな選手が猛スピードで走り回っている。高速集団が斜面の岩場に突入すれば、コントロール位置はトリッキーな上に、技術的にも無頓着な選手が多く、コントロール探しの大騒ぎとなる。そして誰もが尋ねもしないのにコントロールの位置を教えたがる。なんとも、すべてがショックな体験だった。

ついに憧れの地ノルウェーへ

8月下旬、ついに憧れのノルウェーの地に足を踏み入れた。フィヨルド地方でのランニングセッ

ションの後、9月上旬には杉山と合流して、本格的なトレーニングキャンプが始まった。世界選手権大会が開催されるコングスベルク周辺のトレインは、なだらかな丘陵地帯にファインな地形と美しい湿地が散在し、通行可能度も非常に良好な、まさに理想的なノルウェーの森であった(資料3)。

トレーニングキャンプでは、英国のマイク・ダウン選手の車に便乗させてもらった。彼は当時の英国のナンバー2で、大学を出てからノルウェーで競技を最優先にした生活をしているという。言語と距離のハンデはあるにしても、自分にはそこまでの覚悟はあるのだろうか? 国際レベルで競技を続ける選手であれば、誰もが一度は思い悩む命題である。結局私はそこまでの選択はできなかったが。

善戦、だが結果は

翌週には世界選手権が始まった。当時はクラシカルとリレーの2種目で、予選システムはまだない。1国あたり4人までならばクラシカルにも全員が出場できた。

コングスベルクのトレインは世界選手権らしく高速ナビゲーションとファインな手続きを要求したはずだが、私の技術レベルでは、相変わらず地図と現地とを連続的に確認しながら進むオーソドクスなスタイルを頑固に守り通すことしかできなかった。また、高速のラフな区間を設定しようにも、トレイン内でスピードを上げることはフィジカル面で難

しかった。それでも地図読みに関しては自信があったが、悲しいかなタイムを短縮するための戦略に基づいて、地図読みのスキルを生かすような思考法はまだ身に付けていなかった。要するに「速いオリエンテーリング」ではなく、「うまいオリエンテーリング」のレベルに留まっていたのである。

レースの結果は、クラシカル150分弱で78位。終盤にコントロールを1つ飛ばすというミスをしたものの、それが悔しいというレベルでなく、体力的にも技術的にも世界選手権のクラシカルを完走できたことが素直に嬉しかった。一方、リレーでは、4走で少しは緊張感のあるレースをすることができ、特にレース終盤では、後続の西ドイツの選手に追いつかれながらもなんとか逃げ切った。リレー14位という成績はいまだに日本男子チームのベストリザルトである。

この大会のクラシカルの優勝者は男子がエーギル・ヨハンセン、女子がアン・ベリット・エイドと、いずれも地元ノルウェーが金メダルを獲得した。当時の新聞の一面(資料4)を紹介するが、見出しはそのまんま「金2つ」である。

フィンランドでの

再挑戦

技術的な課題よりも体

力面で打ちのめされた最初のヨーロッパ遠征から帰国後は、体面での強化を意識した。その甲斐あってか、翌年3月の風祭の全日本では念願の日本チャンピオンになることができた。体力的な裏打ちもあり、このころから「うまいオリエンテーリング」よりも「速いオリエンテーリング」を具体的に志向(嗜好あるいは試行で

もいいいけど)することができたと考えている。ルートプランとその実践であるナビゲーションにおいて、スピードと技術に適度なメリハリをつけられるようになり、タイムの短縮が可能になったのである。

さて、オリンピックの開催年との重複を避けるために79年からは世界選手権は奇数年開催と

世界への挑戦

なった。78年からの連続開催である。フィンランドのタンペレ周辺のテレインは、微地形と藪、アボガリオが複雑な集合体を形成する、テクニカルでトリッキーな森である(資料5)。こうしたテレインでは連続的な地図読みでナビゲートしようとする、とてつもない時間がかかってしまう。ラフな区間をできるだけ長く取り、かつトリッキーな部分への侵入と脱出を最短で済ませるようにすることが、タイム短縮のカギとなる。

クラシカルでの忘れられない思い出は、ラストスタートを引き当てたことである。各国のエースが集う第4枠にエントリーした私は、20分の1の確率でラストスタートを引き当てた。誰にも出会わない(だろう)孤独なレースを強いられたことが、かえって自分のレースへの集中を強化させた。序盤の不用意なアタックで数分をロスした後は、大胆かつ慎重な理想的な「速いオリエンテーリ

ング」が実践できたと思っている。130分代の55位。当時の私としては十分に満足のできる結果である。リレーでは2走を走り、序盤ではスイスやスウェーデンといった強豪チームと併走できたことも私自身としては大きな収穫であった。チームは4走へのチェンジオーバーの時点では前回は上回る13位をキープしていたが、最後には最下位に沈んだ。

いいことばかりじゃない

フィンランドの世界選手権までは私は確実に強く、そして速くなってきた。79年のシーズンは全日本で優勝してから遠征をはさんで、秋の公認大会も負け知らずであった。しかし、いいことばかりが続くわけではない。80年の春から、深い疲労の谷に落ち込み、さらには故障が重なり、思ったように走れない時期が続く。オリエンテーリングを本格的に初めるまで、基礎的なトレーニング

を積んできたわけではなく、基礎体力のない部分が露呈してしまったのだ。今回は山岸担当の連載の最後として、不調からの脱却のプロセスと私が最も速かった80年代後半の競技生活を書いてみたい。

